私は活火山である。大事なことは事前確認するにも拘らず、ごく稀にいい加減な答えのお蔭で時間と金銭を浪費するショックという物体を火口に投げ込む日本人が、私のマグマを刺激する。それでも爆発しないように抑えるものだから食欲が減退する。食欲を減退させるものは最大の敵である。そして食欲が出ないということは大問題だ。だがそこに折よくマグマ鎮静剤が投与される。それが今回は「オペラ映画」だった。

今年はジュゼッペ・ヴェルディ生誕 200 年ということで様々な企画が成されているが、その一環であるイタリア文化会館の「ヴェルディ名作オペラ映画祭」＜6 月 6 日～9 日の毎日「椿姫」「リゴレット」「オテロ」の三作上映＞に行ってきた。因みにイタリア文化会館から知らせが届くのはいつも遅く、当日というのはザラである。従って私もヒョロリと行って「今日のチケットありますかぁ？」と尋ねたりする。時に企画物によって予定時間 15 分過ぎに始まるようなことがあっても私のマグマは爆発しない。それはおそらくマニュアルではなく人間の動きを見て対応しているからだと思う。私の知人のフランス寄りの日本人についても答えをくれるのが遅くても気にならない。それは「いいかげん」から発しているわけではなく、結果には響かないからだ。

そういうわけで今回のタイミングは「オテロ」だった。私は何故かシェイクスピアというと「オテロ」に縁があって演劇を含めてこれで三回目だ。妻子を早く亡くし、音楽家たちの養老院を作ったヴェルディの「オテロ」初演は 1887 年。今回の 1986 年製作映画の主役はプラシド・ドミンゴ。指揮者は懐かしいロリン・マゼール。演奏はミラノ・スカラ座管弦楽団と合唱団。ローマでのセット撮影、クレタ島のロケなど巨額の費用が投じられたが、中でもヴェネツィア時代の帆船を建造して撮影されたというオテロの帰還シーンはさすがの迫力だった。プラシド・ドミンゴの歌は勿論素晴らしいが、デズデーモナ演じるソプラノ：カティア・リッチャレッリの高低・強弱の全てが安定した美声が素晴らしい。そしてすごく気に入ったのはヤーゴ：フスティーノ・ディアス。現在は引退して後進育成に力を尽しているというが、バスバリトンという音域の存在感があった。テノールの上がカウンターテナーなら、バリトンの下がバスバリトンというわけか。バスよりもバリトンよりも弾力のある心地よい響きだった。

それにしてもシェイクスピアの「悲劇」を考えてみると、多分に権力に対する抵抗と人間のもろさが見て取れる。権力と引き換えに失う愛。権力を取り巻く羨望、嫉妬、権力の増大と共に曇る真実を見抜く目。オテロ、ヤーゴの「生まれ」から這い上がろうとする人生の選択と格差と結末。そしてその欲望の戦いはいつもデズデーモナのように清い真実の愛を殺してしまう。シェイクスピアを学んだ夏目漱石の小説にも共通項がある。もろい人間。愛の不確かさ。懺悔なき悪の神に対する人間の罪の哲学。

印象的だったのはオテロの人生を聞いて「その悲しみ」ゆえに彼を愛したデズデーモナと、彼女の「憐れみ」ゆえにデズデーモナを愛したオテロの愛の形。人間の悲しみに寄り添う神の愛のようでもある。そして出自のために正義で英雄になったオテロと、悪の道を究めようとしたヤーゴに現れる欧州身分制。「嫉妬は蛇のよう」という表現はフランスの古謡にもあるが、それに囚われる苦悩を持つのは人間のサガだろう。

それにしても本人に「これどうなんですか？」と聞けば早いのに、と思ってしまう私であるが、そう単純にいかないところが示唆物語になる所以である。　(2013.6.9)